

目 次

表紙の説明	1
理学部長就任にあたって	和田 昭允..... 2
新しい理学博士の諸君の門出に寄せて	藤田 宏..... 4
ご挨拶	久城 育夫..... 5
自由なる道	田澤 仁..... 7
小柴昌俊先生の学士院賞受賞によせて	折戸 周治..... 10
理学部の発展を示すプロット	和田 昭允..... 11
理学部研究ニュース	13
学部消息	17

表紙の説明

新しい表面原子配列像観察装置

我々は超高真空中で作動する高性能の反射高速電子回折装置 (UHV-RHEED) を開発し、これが表面の原子配列構造の解析や一原子層レベルの結晶成長の研究に有力であることを実証し、この方法を発展させてきた。この RHEED の観察中には表面より X 線が放射されているが、これを検出する場合に、全反射角分光 (TRAXS) 法によると非常に高感度に表面の元素分析ができることを発見し、この方法の命名もした。この原理を適用した新しい表面原子像の観察法も発明 (米国、英国の特許を取得) した。文部省より特別推進研究として研究費の補助をしていただき、この表面原子像観察装置を実際に作成してきたが、表紙の写真のような装置としてほぼ完成した。表面原子の観察のためには清浄表面が必要であり、装置は 200℃ にベーキングできるようになっている。現在約 1×10^{-10} Torr の超高真空が得られている。試料は右側の試料準備室 (ここも超高真空) より導入し、ここで試料表面を清浄化して金属を蒸着し、表面の一原子層の超構造が形成されていることを RHEED で確認し、これを左側の本体に導入して原子像の観察を行うようになっている。

電子顕微鏡等の分解能はレンズの球面収差係数 C_s で決まるが、本装置では $C_s = 0.6$ mm であり、世界的にみても最も小さい値である。電子ビームの直径は約 $2 \sim 5 \text{ \AA}$ であり、これを 2 次的に走査して表面の原子像を撮影する。現在、透過走査電子顕微鏡 (STEM) として用いた場合には、Au の 2.04 \AA と 1.43 \AA (写真) などの原子配列の格子像が撮影されている。また電子ビームの直径が原子の大きさに近いので、原理的には原子 1 個またはそれに近い所の局所的な元素分析が可能であり、この研究を進めている。このように分解能、真空度、分析能力など世界一の性能を誇る装置となっているが、さらに改良を加えている。

物理学教室 井野正三

理学部長就任に当たって

和田 昭 允



この4月から、はからずも理学部長の重責を負うことになり、恐縮すると同時にいささか困惑しているというのが偽らざる心境です。幸い学識識見ともに優れた久城・田沢両評議員がおられるので、力を合わせて1年間およばずながら全力投球をして、理学部の意気を大いにあげる基盤を作る覚悟ですので、よろしくお願い致します。

さて、理学部の活躍の舞台である理学という言葉ですが、昭和39年に理学部将来計画をまとめた小谷委員会の報告に、“従来主として理学部において研究・教育の行われていた基礎自然科学を理学と呼ぶ”と定義した上で、“理学は自然に関する真理を探求することを目的とし、それ自身、わが国及び人類の文化の建設向上に寄与するものである”と書かれています。自然の全てが我々の研究の対象だということであり、理学部という一体性をもって始めてこれが可能となるわけです。そういえば、コナン Doyle は彼の小説 (A Study of Scarlet) の中でシャーロックホームズに、“One’s ideas must be as broad as Nature if they are to interpret Nature” と云わせています。また、最近 Hawking の書いた “A Brief History of Time” は、宇宙の創造 (Big Bang)

から 100 億年の物質と生物の進化を経て我々人類が出現し、その知的生物がまた宇宙の起源について思いを巡らすという、全宇宙の時・空間の壮大なシナリオを、大筋ながらポイントを外すことなく鋭く描いています。たしかに、宇宙、素粒子、数学、情報、あるいは地球や生物等々といった理学の諸分野は、その底では、我々が考えているよりはるかに密接なつながりがあるように思われてなりません。

理学と理学部の一体性は自然そのものが保証してくれているといっても良いでしょう。わが理学部は、学問の歴史的背景や教育の便宜上、それぞれの教室という単位に分かれています。研究者はその自然探求の本能(?)の赴くままに、これらの港から自然という境界のない大洋に乗り出して行っています。自分のことを云って申し訳ありませんが、私も化学教室という港を出て、物理教室に寄港したまま居心地が良いので居ついてしまい、そこを母港として生物物理という海で網を引いているわけです。領海侵犯といわれないのが研究社会の有難いところです。こうなったのも、私が学生の頃から、化学教室での恩師の森野米三先生が“研究者であるからには二番煎じの研究は絶対するな”ということを目にタコができる程云って下さったためです。ところが、私の周りには秀才が雲のようにいて、とても一番煎じが出来るとは思えませんでした。そこで、できることは誰も居ないところに行くしかない、弱気の私にとって誠に合理的な結論を出したわけです。誰も居ないところで自分の思うように研究するのはよいものですが、そのように出来るのも、自然界には未開拓の分野が無限に広がっているからなのでしょう。

理学研究は広い自然が相手であると同時に、日

本という狭い島国に閉じ込められず広い国際社会が相手だということも嬉しいことです。科学に国境はないといえます。しかし、国境が本当になくなるのは国同志があらゆる意味で科学的に同じレベルになってのことではないでしょうか。わが国は、そして特に東大理学部は、科学研究の成果という狭い意味のレベルでは世界のトップグループに入っています。しかし、まだ、世界の一流若手研究者が東大理学部で1～3年間修業をして、研究履歴に箔をつけて行くところまで行っていません。私は、真の研究・教育は、わが国の若手研究者や学生が、このように他流試合に来た連中と混ざり合って議論することによって相互に刺激し高め合ってこそ、初めて満足できるものになっていると思っています。このレベルまで理学部は残念ながら達していないということは、言葉の壁や生活・習慣の違いによるハンデキャップは多少あるにしても致命的なものでなく、東大ですらも国際常識から見るとまだまだ恵まれた研究環境ではないというわが国の大学の事情が問題なのです。

世界の一流の研究者が、良い仕事が出来るところなら万難を排しても乗り込んでくるという習性を持っていることは、良くご存知の通りです。理学院計画の第3次素案も、東大理学部が一流研究者が自然と集まってくるような、世界的研究交流の要衝となるようにとの願いを込めて書かれたものです。東京大学が国内の他の大学と比較してどうのこうのという議論は、科学の研究が世界を相手にしたものであるという正しい認識を持つならば、はるかに次元の低いものとなってしまいます。大学のレベルの評価を国内に限って行う限り、東京大学の発展はないということを論理的に云うことが出来ます。つまり、国内の問題とする限り、評価の原点を東京大学におくか、あるいは他の大学のどれかにおくということになり、そこで出てくる結論は、東京大学の発展をおさえて他大学を発展させる、あるいはその逆、ということになります。つまり、このような判断基準をもつかぎりレベルアップの力は働かず、重心を引力点とする

平均化の力しか働かないということです。これに反することは、特定大学のエリート主義ということになり、これはもちろん避けるべきということになります。学問が世界人類のためである以上、我々は大学のレベル評価の原点を国際的基準に求めなければなりません。つまり、最終目標は日本の全大学が国際的に超一流になり国際貢献を行うことです。しかし、これは一朝一夕には出来ませんので、その方向に向かう第一歩として、いくつかの基幹大学を国際化（前記の意味での）し、わが国の責任をはたすということになります。文部省はこのような大所高所に立った判断を当然すると期待致します。この意味で、理学部の将来計画としての理学院の目的が、東大理学部が国際科学社会の中で、日本を代表して活躍し貢献するという責任に基づいて立てられているということを私はもっと主張したいと思います。

東大理学部が世界に対して万丈の気を吐いてこそ、わが国社会の一般の方々から“東大頑張れよ”と応援してもらえらると思うのです。でも現状は少し違うようです。入学が難しいということは、良い大学の結果として出てくるべきものですが、現状は難関であれば良い大学であるという本末転倒がおこり始めているのではないのでしょうか。また、将来計画でも、ただ単に新しい名前をつけただけで新鮮味を出すようなことは、はなはだ島国的発想であり、お役所はごまかせても一般大衆の英知、あるいは国際社会の厳しい目をだますことは出来ないでしょう。また、お役所の方にしても目立ったトピックスだけを育てるやり方は、戦艦とゼロ戦だけで世界戦争に勝てると思ったあの苦い歴史の教訓から何も学んでいないことを示しています。

広い理学の基礎に立っての真理の解明、自然の探求が人類社会の発展に最大の寄与をしてきたことは歴史が証明しております。これは自然が示してくれている多様な現象を広く感受できる広域のアンテナを持った大学が総合力を発揮しなければ出来ないことです。

東大理学部は自然科学の全分野を広く包括し教

官・職員・学生約2200人が活発な研究を展開をしているわが国の最大最高の頭脳集団です。これからの20世紀末そして21世紀へと、わが国が創造性豊かな先進文化国家として、国際社会の尊敬を受けながら生き続けるために我々が果たさなければならぬ責任はまことに重大であります。

最後に、我々が研究しながら感じている喜びを、鳥違いのシェークスピアが“アントニーとクレオパトラ”の中に書いているのでご紹介しておきます。

In nature's infinite book of secrecy
A little I can read.

新しい理学博士の諸君の門出に寄せて

理学系研究科 委員長

藤 田 宏

この度、理学博士の学位を得られた皆さん、おめでとう。理学のそれぞれの専門において研鑽を積み立派な学位論文を完成された皆さんの努力に対し敬意を表しつつ、理学系研究科の教官一同を代表して心から祝福致します。

恒例により、このおめでたい機会に理学系研究科委員長として新理学博士の皆さんの門出を祝う言葉を申し述べる次第です。

私は、次の三つの事柄を皆さんにお願いして祝辞に代えさせて頂きたいと思えます。

その第一は、今日の栄えある日に皆さんが感じておられる理学者としての

誇りと志し

を末永く持ち続けて頂きたいと言う願いです。皆さんが東京大学から取得された理学博士の学位は世界で最も尊敬尊重される学位の一つです。海外に出かけて共同研究、あるいは、他流試合の機会をもたれたとき、このことに思い当たられるに相違ありません。皆さんは間違いなく一人前の学者として遇せられます。このような国際的に高い評価は、先輩達の精励の賜ですが、皆さんも自信を持って理学の先端を競い合う国際競争の場に出陣して下さい。

また、皆さんは、それぞれの専門での学問的成を目指してこの道に入ってこられたに違いあり

ません。一世を風靡する学説を編み歴史に残る大家たらんと野心に燃えている人もいるでしょうし、また一方では、地道な専門で好学の操を保ち、学界の一隅を照らす光たらんと決心している人もいます。いずれも佳きかな。理学者として良いスタートを切った皆さんの前途は洋々です。しかしながら、研究者の人生は平坦ではありません。疲労、停滞、そうして挫折は誰にでも起こります。そのようなとき、今日の高揚した気持ちを糧とし、あるいは、今日新たにした初心に戻り、元気を回復して理学者としての志操を高く持ち続けて下さい。

お願いの第二は、学問において、

良い成就是次の課題を提出

するものであることを理解して頂くことです。良い完成は次への出発です。理学博士にふさわしい仕事を成就して学位を得られた皆さんは、このことを実感しておられるに違いありません。これから始まる研究者としてのキャリアにおいて、さらなる発展につながる独創的な仕事を数多く成し遂げて行かれることを祈ります。

最後にお願ひしたいことは、自然を相手とする理学は妥協を許さない厳しい学問であります、それを遂行する

理学者は極めて人間的な存在

であることに留意して頂くことです。理学の研究に於て、日常的には職人的な集中・腕の良さも大切ですが、正念場での困難を突破する画期的な進歩は、研究者がその仕事への感激と情熱を持ち続けているかどうかにかかっています。

私が専門とする数学では、各国の学派の特徴に明らかにそれぞれの民族性と国情が浮き出しています。おそらく、これはどの専門についても、さらに、個人についても同じだと思います。すなわち、理学者の業績を見ると、個々の論文ではそれほど認められなくても、長期に亘る研究の流れには、研究者の個性や品格が反映しているものです。

また、当然ながら、最近の理学の研究遂行に欠くことのできない研究者どうしの協力・交流は、近い仲間のそれであれ、国際的なこれであれ、人間的な信頼と友情に基礎をおくものです。

すでに確立した研究者としてのスタートをきられた皆さんに対しては、老婆心に過ぎたお説教をしたようです。皆さんの理学者としての多幸な前途を祈る気持ちから出たものですから許して下さい。

本日はおめでとう。健康に気をつけて頑張ってください。

(平成元年3月29日学位証授与式)

ご 挨拶

久 城 育 夫 (地質学教室)

本年4月より評議員を仰せつかり戸惑うことの多いこの頃です。私はこのような役に向いていないと確信しており、理学院計画その他重要な問題が多い時期にその役目を全うする自信は全くありません。しかし選出された以上、理学部の為に尽す義務はあると思いますので、私自身もこれまでお世話になった理学部のことであり、出来るだけの努力をしなければと思っております。それにしても選挙とはいえ多少とも当人の意志が考慮される機会があってもいいとは思いますが、いずれにしても、私はこういうことに未熟なので、皆様方に今後色々とお指導をお願いする次第です。これだけではご挨拶にしても一寸短過ぎる気がしますので、最近改めて感じ、また思ったことを少し書かせていただきます。

執行部の一員となってから、これまでより理学部の色々な分野の方々と接する機会が多くなり、理学部には種々の分野の有能な人材が多く、また今まで私が知らなかった様々な理学の研究が活発

に行われ更に新しい計画に発展しつつあることを再認識しました。そのような認識をするにつけ、理学部の能力をより有効に発揮出来ないかということ強く思うようになりました。一つは、種々異なる分野の研究者間での共同研究についてです。地球科学などの応用科学では基礎科学の導入によって画期的な発展をすることがあります。最近の例として、私の友人の地球科学者が、物理学教室の上村研の若手の研究者の方々と、シリカの構造についての分子動力学の計算を非経験的分子軌道法に基づいて行ったところ、鉱物学に衝撃を与える成果をあげ、Nature 誌もそれに対して賛辞をのせました。また、私がしばらく居た米国ワシントンのカーネギー研究所で、核物理の研究者と地球科学者とが日本列島のような島弧の火山の溶岩の ^{10}Be を測定し、その火山のマグマが海洋のプレートに物質を含むことを示し、プレートの沈み込みを強力に支持するとともにマグマの成因を解明する新しい手がかりを与えました。このような

例は地球科学だけでなく他の分野にも多くあります。おそらく基礎科学間でもあると思います。カーネギー研究所では、自然科学の種々の分野の研究者が一つの建物の中で研究を行っており、廊下やコーヒー・ルームで、或はパーティなど折あるごとに話をし、常に新しい研究の糸口を引き出す努力をしています。そのような努力はしばしば新しい研究分野を開くことに貢献してきました。理学部はカーネギー研究所などよりはるかに多くの分野の人材を擁しており、互いの研究の利点を生かして共同で研究をする機会がふえると、予想しなかったような新しい研究成果を生む可能性が非常に高くなると思われます。特に、全く違う分野の人達の間での話し合いや議論が面白い結果を生むのではないかと思います。その為には、目下計画中の、そして理学部の“悲願”でもある中央化構想を実現することが必要ですが、それよりもまず理学部の研究活動をお互いにもっとよく知ることがより緊急のことと思われます。その為には予算はあまり必要ではありませんが、お互いの研究活動を知る機会をもっと増やす必要があります。特に理学部の建物が分裂している現状ではかなりの努力が必要でしょう。先日主任会議で、教授会を利用して研究を紹介することを復活させたらどうかという意見がでました。それも勿論大変結構なことですが、若い人も含めてもっと自由に

(出来れば何時でも好きな時に)話し合える場を作ることが必要に思われます。和田学部長も同様のことを考えておられ積極的にこのことを進めるおつもりで心強く思います。

次は若手研究者の研究活動についてです。これは東大理学部に限ったことではありませんが、若手の研究者で少なくとも私の知る範囲の人達は、外国の大学や研究所で何年か研究すると非常な成果をあげて帰ってきます。中には乞われてそのまま向こうでずっと研究を続ける人も居ます。しかし、それらの人達の多くは帰ってからは向こうに居た時に比べて、はるかに研究活動が低下します。これには色々な原因があると思われますが、多くの

人の場合は能力が急に低下したのではなさそうです。従って原因は研究する環境の変化(悪化)およびそれに起因する研究意欲の低下にあると思われます。勿論、外国でお客さんとして研究に没頭できる条件が、理学部の一員として義務を果たさねばならない場合に満たされるとは思われません。しかし、とにかく能力のある若手の研究者に対してはその条件に近付ける努力はする必要があると思われます。よく知られているように、アメリカでは学位をとって assistant professor になった若手の研究者の多くは tenure を取る為もあるでしょうが、この時期に学生の教育を行うとともに、それこそ“必死”になって自分の研究を發展させます。周囲の人達も彼らの研究がやり易いように予算や時間の配慮をする場合が普通です。また postdoctoral fellow となって研究に専念する人も多く居ます。ただしこの場合は研究のテーマが多少制約されることはありますが。一方、日本では学位を取って助手になると、いわゆる雑用その他の理由の為に研究が一段落してしまうことが多いようです。また、postdoctoral fellow の数・質ともまだ十分ではありません。学位を取ってからの数年間は独立した研究者として成長する重要な時期で、この時期の研究活動の差が、後年の研究・教育活動の差に大きく影響しているように思われます。日本では色々な事情があつてすぐにはアメリカのようなシステムに変えることは出来ないうしょうが、もう少し差を縮めることは何とか出来るのではないかと思います。本当はアメリカなどよりもっといいシステムが出来ればと思われます。そのようなシステムが理学院においてでも実現することが期待される次第です。いずれにしても理学部の優れた多くの人々の能力を基礎科学の為にフルに發揮させないことは極めてもったいないことで、これについての改善策を皆様方とともに考え少しでも実行出来ればと思われます。長いご挨拶になってしまいました。

自由なる道

田澤 仁(植物学教室)

余り年号にこだわらない私にも、昭和の時代が終ってみると一種の虚脱感と共に安堵感がなきにしもあらずである。来年3月末、定年で東大を去る私は昭和というものを自分に重ねて最も長かった世代の一つに属し、かつ旧制度の大学で教育を受けたものは、私どもをもっておさらばということになる。虚脱感と安堵感は戦争が終わったときにも味わったように思う。昭和20年、私は四月から海軍経理学校予科生徒で、海軍の接收した樫原の敵傍中学にいた。戦争は文字通り末期的で、友人の家からくる便りも、家が焼かれたという報せが多かった。夏休みには、故郷へ休暇で帰れるという夢も無残に消え、当時15歳であった私も、死というものを予感せざるを得ない状況だった。そんな最中での8月15日の終戦だったので、虚脱感と同時に助かったという安堵感、それにも増して、家へ帰れるという喜びが大きかった。もっとも満州、台湾、樺太など、外地から来ていた生徒は、帰る家とてなく、とりあえず親類や友人宅を頼って去っていったのである。終戦は旧来の日本の思想をくつがえす大事件で、私達若者は、生活は苦しかったが、心は伸び伸びとした解放感を味わった。占領下ではあったが、軍国主義の束縛から放たれて、高校、大学と学んだわけである。高校は京都の三高で、一高の自治、三高の自由といわれるくらい、学校は自由の雰囲気には溢れていた。私はいきなりボート部に入ったので、勉強しない自由を満喫せざるを得ず、4月から11月位まで、瀬田の唐橋と石山寺の近くに合った合宿所で合宿して学校へはあまり出なかった。即ち三高に入ったのではなく、三高のボート部に入った生活をした。ボート部に入って驚いたのは、先輩、後輩の区別をせずお互いに呼びすてにしていたことである。

Aさん、Bさんなどというと、さんは止めろと叱られ、最初は言いにくかったがすぐに4つも5つも上の先輩でも呼びすてにするようになった。呼びすてになると年下のものでも、上の者と自由にものが言え、自ずから自由な雰囲気が醸しだされるのである。これはボート部だけでなく、寮でも全く同じであったらしい。さすが社会に出ている先輩に対してはサンズけで呼んだが、一緒に漕いだ仲間は今会ってもお互いに呼びすてである。学業は1、2学期は合宿のため悪く、3学期の試験でとりもどすという、綱渡りをしながら、進級、卒業した。落第なども学校は親に通知するでもなく、親は何となく、どうも息子は3年過ぎたのにまだ行ってるようだ、気が付くくらいであった。作家の織田作之助は結核や女性問題で3年を3回やり、最後は平均点はありながら、無断欠席日数が多すぎて、教授会で伊吹武彦教授(仏文)らの弁護も及ばず、ついに、退学となった。しかし学資を提供してくれている義兄の手前、退学を秘して上京し、茗荷谷の青山光二の下宿に泊まり、青山らに協力してもらって、三高は卒業したが東大文学部の入試に失敗したことになっていたが、数ヶ月後にはこのペテンがばれてしまったということである。そのお兄さんになる人に、私は三高1年のとき、近鉄線の電車の中で会った。三高の帽子をかぶって電車に乗っていたところ、50過ぎと思われる年配の方が、「伊吹先生はお元気ですか。私は織田作之助の兄です。弟は伊吹先生には大変お世話になりました。先生にどうか宜しくお伝え下さい。」と言われてびっくりした。

さて脱線したが、私は旧制の最後の高校生として卒業し、大阪大学理学部の当時新設の生物学科に入った。ここもすぐ自由なところで、授業に

は余り出なかった。3年生になって卒業研究に入ると、嬉しくてたまらず随分と張り切って、朝早くから夜遅くまで研究室にいた。指導は本学出身の当時38歳の神谷宣郎教授で、私達の意志を最大限尊重して下さった。先生は日本における植物の細胞生物学の草分けで、植物の運動生理、水分生理で世界をリードされ、その高い業績に学士院賞が与えられている。先生は東大時代卒業研究で今で言えば細胞生理学的なことをやろうとして、当時その分野の教授が居られなかったので、自分一人で卒研を進められた位の方で、自分も勝手にしたのだから、諸君を縛るようなことはできないと、よく言っておられた。卒業後大学院に入学したのだが、旧制の場合、講義はなく、ひたすら研究をすればよいという、極めてフリーな状態であった。私は2年2ヶ月で大学院を中退し、25歳のときドイツ交換学生(DAAD)としてチュービンゲン大学植物学教室のビューニング(Erwin Bünning)教授のもとに留学することになった。

ビューニング教授は今でいうChronobiologyの草分けで且つ先導者でもあった。その後版を重ねる名著Die Physiologische Uhrの1955年の初版本は、助手として1930~35年の間先生が勤務されたイエーナ大学の当時の教室主任オット・レンナー(Otto Renner)教授に75歳の誕生日を記念して贈られている。ビューニング先生は序文でレンナー教授に次のような謝辞を捧げておられる。「私はここに1928年(当時22歳)はじめた内在性日周リズムの問題についての仕事を1930~35年に亘って当時オット・レンナーが主任教授であったイエーナ大学の植物学教室で続ける可能性を与えて下さったことに謝辞を表したい。この時代、さらにその後にも与えられた私に対する励ましと援助を私は忘れることはできない」当時のドイツでは、助手の自由度は小さく、特に誰一人信じてくれなかった植物の内在性時計についての研究を続けさせてくれた教授の存在は、当時のビューニング助手にとって天の恵みのように、思われたのであろう。

ビューニング先生とは最初の1年はマメ科のササ

ゲの葉の日周運動に対する低温の影響について共同実験を行ったが、後の1年は私の関心からライナート講師(後のベルリン自由大学教授)と組織培養の共同実験を行った。先生は自分から離れていった私に、自分のグラントから毎月当時としては大金の600マークを黙って援助して下さい。ちなみにDAAD奨学金は250マークであった。ビューニング先生は1978年日本学術振興会の招へい教授として1ヶ月日本に滞在され、日光分園にも宿泊され、当時助手だった新免輝男氏の作った鶏の水炊きを奥様ともども賞味されたのを思い出す。先生は多くの国のアカデミーの外国会員や多くの大学から名誉博士号を贈られているが、1986年12月18日にはゲッチンゲン大学から名誉博士号を贈られた。そのときなされた講演は、Ber. Deutsch. Bot. Ges.の100巻ののってあり、ここにそれを紹介させていただくことにする。

「本日私はもちろん1927年から28年にかけての2学期間この大学で化学と物理学を学んだ時のことを思い出す。当時のゲッチンゲン大学は世界における数学-物理学の中心とされていた。その頃ゲッチンゲンで学びあるいは教えた指導的科学家が博士を取得した時何歳であったか? James Franck(物理学)24歳, Adolf Windaus(化学)23歳, Alfred Kuhn(動物学)23歳, Werner Heisenberg(物理学)22歳, Pascual Jordan(物理学)24歳, Otto Hahn(化学, 物理学)22歳, Max Delbrück(物理学, 生物学)24歳。このうち幾人かは私の勉強時にすでにノーベル賞を得ていたし、その他の人も後に得ている。彼らはすべて、若くから“運転の教師”(Doktorvater)から離れて独立していた。彼らは十分早く、未知の分野で独りで運転するための免許状を得ていた。

30代の半ばまでは、大部分の人は冒険の勇気と創造的なファンタジーで、若々しい遊戯衝動にアクセルを入れて走ることができる位なお十分若い。さらに年とってくると、大部分の人は運転の先生の指示から離れて、自ら自由に考案したことを完成することのみ専心することができるようになる。

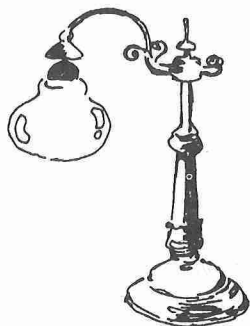
貴方達は例えばMax Delbrückのように物理学から生物学へと転向して、それでノーベル賞を得ることすらできる。

研究者にとって決定的に大切なことはどれだけ多くの個々の事柄を学んだかということではない。より重要なことは、高校や大学で“網”を張ることである。その網は知識の種々の領域に入り込み、必要と思われる個々の事柄を素早く発見することを可能ならしめるものである。この網は、植物学でいえば、研究者に彼が学び研究しているすべての事柄で、生物学の他の領域、化学、物理学との関連を認識することを可能ならしめるのである。このような基本的な足場を持っている人だけがDelbrückのように物理学から生物学へと乗り換えることができるのである。」

先生は講演日の3日前に書かれた私宛の手紙で、講演の主旨を次のように述べておられる。「私が強調したいのは、官僚主義を排除すべきだということ、そしてわれわれのところでは研究者が全く

自由に独自のIdeeを探究できるようになった時には以前と比べると余りにも年をとっているということです。今では博士号を取得するのはほとんどの場合約30歳です。これでは全く新しい（“気違いじみた”）道を探すにはすでに年をとりすぎているのです。」

現在はジュンニグ先生の学ばれた時代とは異なり、恐ろしく知識の量も増えており、先生のおっしゃることがそのままあてはまるとは言えないかもしれない。しかし理学院を考えるにあたっての一つの警鐘かもしれない。設備や機構がいくら整備充実しても、形式主義に陥ったり、若い人が自由に研究する雰囲気が損なわれたりしてはならないと思う。大学院は“学校”ではない。教官も学生も自由の尊さを知り、自由の雰囲気を醸成しなければならない。さもないと能史的な学者のみが理学院から育っていくことになるのではないかと恐れるのである。



小柴昌俊先生の学士院賞受賞によせて

折戸周治（物理学教室）

理学部名誉教授の小柴昌俊先生がこの度学士院賞を授与される事になりました。仁科賞、朝日賞文化功労賞に続く先生のこの受賞は当理学部にとっても大変喜ばしい事です。先生の御業績等につきましてはつい先号の理学部公報の「文化功労賞受賞によせて」で紹介いたしました。ここではそれに重複する部分もありますが改めて紹介させていただきます。

小柴先生は昭和26年東京大学理学部物理学科を御卒業後、東京大学及びロチェスター大学大学院を経て学位を所得され、ロチェスター大学、シカゴ大学研究員、東京大学原子核研究所助教授を経て38年に本学部に着任されました。

先生は宇宙線、素粒子の分野にわたって先駆的、独創的な研究を数多く行ってこられました。なかでも宇宙線の超新星起源の指摘、原子核乾板による宇宙線相互作用の研究などが初期のお仕事として有名です。また素粒子物理の分野においては49年当時に電子・陽電子衝突実験の将来性を鋭く見抜かれ、理学部付属高エネルギー物理学実験施設の設立に尽力され、これによって国際協同実験DASPによる新粒子Pcの発見及びタウレプトンの確立、更にJADE実験によるグルーオンの発見、統一ゲージ理論の検証等の成果を可能にされました。この業績によって昭和60年にドイツ国大功劳十字賞を授与されました。更に素粒子物理国際センター長として欧州原子核機構(CERN)の e^+e^- 衝突装置LEPを用いた国際協同実験を発足させると共に、陽子崩壊、ニュートリノ天文学等の先鋭的な研究を行われました。

この陽子崩壊、ニュートリノ天文学の研究においてはこれまでも増して先生の大胆な発想、鋭い感がきらめき、また次々と的中していったとい

えましょう。特に地下深くに巨大な水タンクを建設し、この内面に20インチの大きな光電子増倍管を敷き詰め、内部で起こる稀な現象をイメージングしようという雄大な発想。また陽子崩壊の下限を押さえた後に、水中で停止した μ 中間子からの崩壊の結果生じる電子がどうやら観測される事から、もう少しバックグラウンドを減らせば太陽からのニュートリノによる発ちよう電子の観測が可能になる事に気づき、その為の手段を強力に押し進められた事。これらの事が突って、タイミングよく発生した超新星からのニュートリノの検出によってニュートリノ天文学の幕を自らの手によって開けられました。まことに「見事」というしかありません。またこの2年間は更に太陽からのニュートリノの検出にも成功なさるなど、ますます研究をご発展なさっています。

なお添えられた写真は本年4月のもので初孫の藤井亜美さん(2ヶ月)をお抱きになっているものです。



藤井亜美(2ヶ月)と小柴昌俊先生

理学部の発展を示すプロット

和田 昭 允

理学部の活動度を示す指標として、科学研究費及び外国出張の年度変化をプロットして見ました。

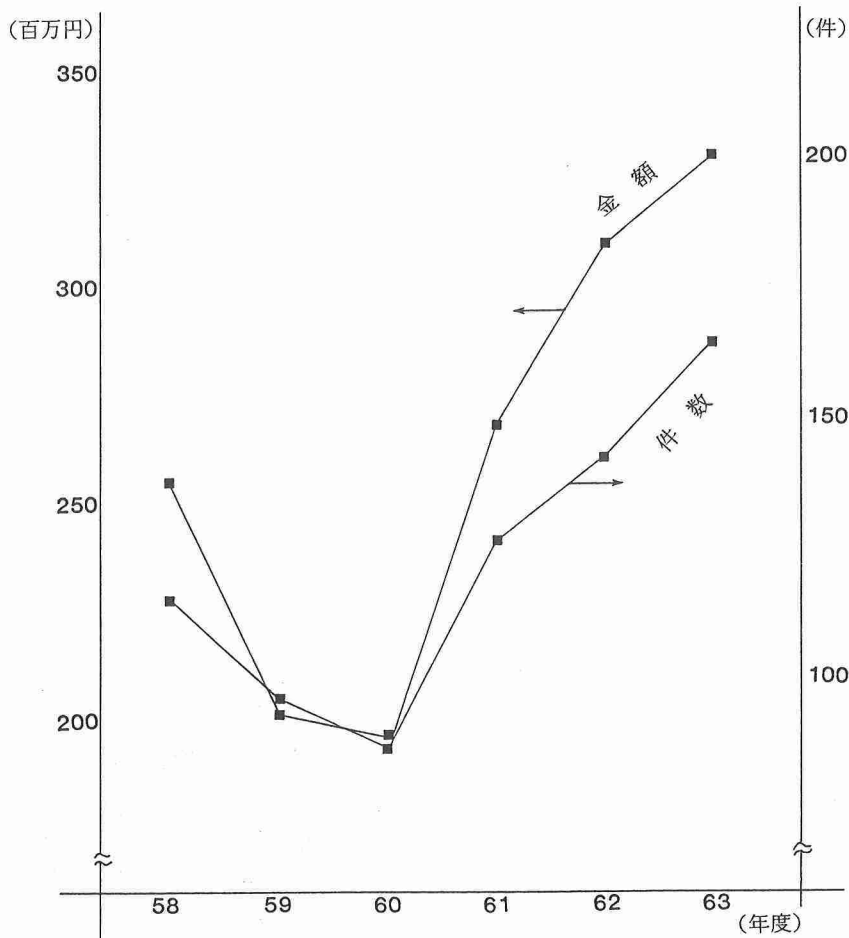
科研費は変動の大きい特別推進等は除いてあります。額と件数とも58～60年にかけて、不可解な低下を示していますが、それ以後は目ざましい上昇を見せています。また、海外出張数は理学部の国際的活躍を示すものですが、これも伸びてきており、特に嬉しいことには、若い層の出張数が著しく増加しているのです。

ここには示しませんでした。学内の他部局との比較を講座・部門当りの量で行っても、理学部

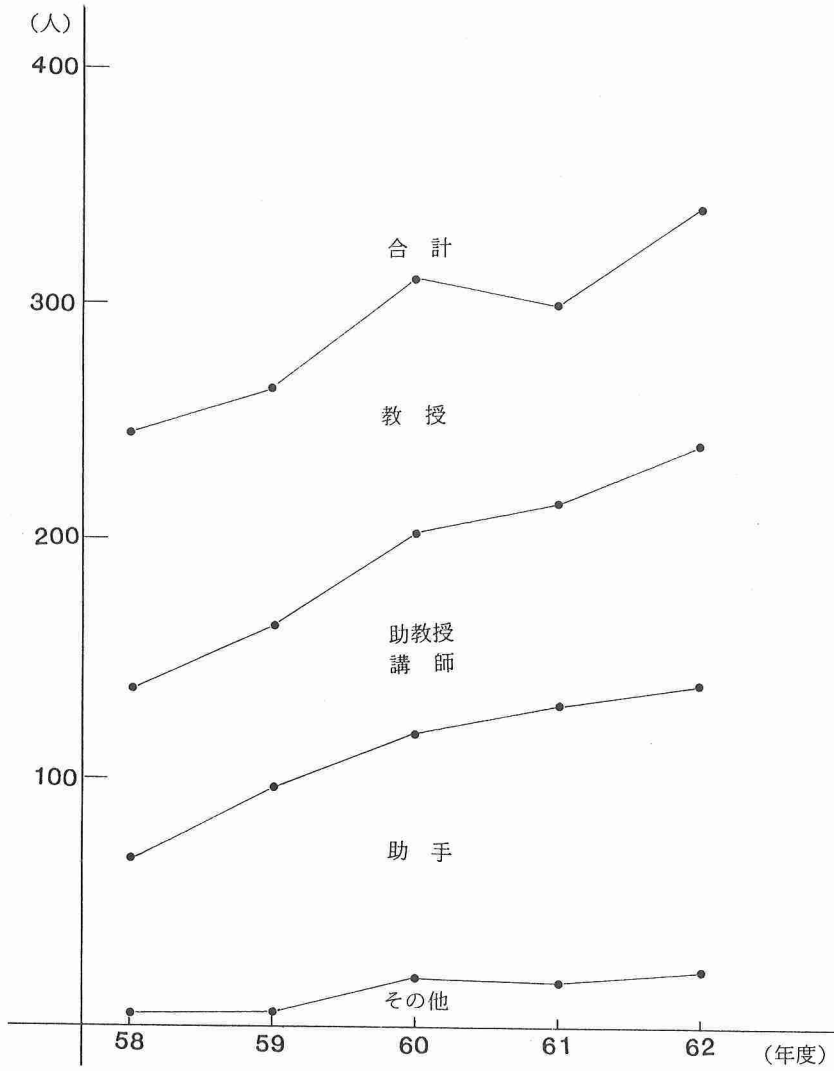
はトップグループの中でも上位に入ってます。とくに、外国からの費用による出張数では理学部が断然抜きんでいます。これはやはり理学という学問が世界を相手にしたものであり、理学部での研究が国際的に大きな関心をもたれていることを定量的に示していることと思います。

最後に、理学部における活動の急速な活発化は、事務関係者に大きな負担増となって来ています。研究者もこの点を理解して、事務手続などの円滑化に充分配慮して下さい。事務方の苦勞をいつも見ている者としてお願い致します。

理学部における科学研究費（一般A+B+C+奨励研究）の額および件数の年度変化



理学部における海外出張の年度変化



理学部研究ニュース

●相転移研究の手法CAMの開発 相転移を理論的に解明する新しい一般論「コヒーレント異常法 (CAM) と超有効場理論」が鈴木によって提唱された。これは平均場近似を用いて相転移・臨界現象の真の振舞いを究明できる極めて強力な方法である。すなわち、平均場近似列の近似の度合をあげると、古典的な発散の係数が系統的に異常性を示すことが発見され、これに基づいて真の相転移点や非古典的フラクショナルな臨界指数が高い精度で評価できる。さらに、スピングラスやカイラルオーダー等のエキゾチックな相転移に対しては超有効場理論が応用され成功を納めている。(20巻4号受賞欄参照) 鈴木・香取・胡・久友・伊藤・川島・木下・羽田野 (物理)

●金属フィラメントから放出される不純物イオン 私は長い間、表面電離型質量分析計を使って仕事をしていたが、その際にタングステン、レニウム、タンタル等の金属フィラメントを使用する。その際、何かか得体の知れないイオンが出るときを時々経験して来た。一般に、表面電離で生ずるイオンは単純なものが多いだけに、この不思議さは尚更不可解である。今まで時に気になりながらも無視して来た不可解なイオンのことをまともに研究し始めている。増田彰正 (化学)

●高密度核物質とSN1987Aパルサー 原子核密度を越える核物質のエネルギー、状態方程式は超高エネルギー重イオン衝突等の実験により将来実験的に解明される可能性があるが、これまで実験的データは存在しない。今年2月大マゼラン雲の中で爆発した超新星1987Aの中にパルサーが発見されたが、佐藤と鈴木は直ちにその解析を行い周波数が1968.629 Hzと極めて高いこと(1秒間に約2,000回転)からその圧力は低密度側で

は低く、高密度側では急激に増加する状態方程式がよく一致することを示した。またこれまで状態方程式としては多体問題の理論による種々の計算があるが実に3分の2近くが誤りであったことを示された。佐藤勝彦、鈴木英之 2月 (物理)

●岐阜県神岡亜鉛・鉛鉱床の成因 神岡鉱山は理学部が巨大水タンクを設置している鉱山であるがその亜鉛・鉛鉱床の成因については、飛騨地域の地質が複雑なこともあって、諸説紛々の状態である。此度箱根で開かれた第1回日中同位体地球化学宇宙化学シンポジウムで、酸素同位体比の研究から、神岡鉱床は白亜紀の火山活動に伴う天水の大規模循環により形成されたという新しい仮説を発表した。島崎英彦・日下部実(岡山大・地球内部研究センター) 3月 (地質)

●日米数学研究所におけるワークショップ 昨年 Johns Hopkins 大学に開所された日米数学研究所において、4月21日~23日の3日間ワークショップ "Representation theory and its applications" を主催した。11名の招待講演者を含め、主にアメリカ東海岸から約40名の参加があった。当数学教室から留学中の松本、宇沢も招待講演を行った。大島利雄 4月 (数学)

●超高スピンポリジアセチレン誘導体の完成 安定なニトロキシドラジカルを m -位置換基として持つ1-フェニル-1,3-ブタジインと対応するヒドロキシルアミン誘導体との混晶を作り、固相熱重合を行なうことにより、超高スピンポリジアセチレンを得ることに成功した。金属光沢を持つ微結晶生成物は室温で磁石に引き付けられる。磁性の本性を明らかにする実験を進めている(日本化学会第58春季年会で発表)。井上克也・古賀

登・岩村秀 4月 (化学)

●60cmサブミリ波サーベイ望遠鏡が観測を開始
銀河系内における分子ガスの加熱メカニズムの解明を目指して、天文学教育研究センターおよび天文学教室の電波天文グループが国立天文台と協力して建設していた口径60cmの小型サブミリ波望遠鏡が長野県野辺山高原に完成し、サブミリ波の初受信に成功して観測を開始した。今後2年程度で銀河系の基本サーベイを完成させる。祖父江義昭・長谷川哲夫・林正彦・半田利弘・砂田和良・阪本成一・伊藤猛 4月 (天文教研セ・天文)

●大腸菌ゲノム編制の研究 DNAをめぐる画期的な分析技術の進展により、各種生物ゲノムの全体像を把握することが世界的に話題となってきたが、大腸菌ゲノムの全塩基配列(470万塩基)の決定を目指す科学研究費重点領域研究が本年度から3か年の予定で実施されることになった。本研究は4つの柱から構成されており、そのうち「ゲノム編制の全体像」(代表者、溝渕 潔)を生物化学教室が中心となって推進することになった。
4月28日 (生物化学)

●遺伝暗号の可変性 「遺伝暗号」は、遺伝情報を読み出す最も重要な法則であり、すべての生物に普遍的と思われていた。ところが、細胞内小器官にとどまらず、ある種の真核生物の細胞質、原核生物についても、「普遍的」暗号とは異なる暗号の使用されていることが、最近、日本において相次いで発見された。そこで、名古屋大学の太澤省三教授を代表とする文部省科学研究費重点領域研究「遺伝暗号の可変性」がスタートし、「遺伝暗号解読のメカニズム」〔代表者、横山茂之(生物化学)〕など4課題の研究を推進することになった(本年度より3年間)。4月28日 (生物化学)

●フェフキダイ科魚類の分類 スズキ亜目フェフキダイ科魚類は東京付近では3種ほどが見られるだけであまり知られてはいないが、沖縄・台湾方面では種数も個体数も多く、重要な食用魚として親しまれている。しかし、分類学的にはむずかしいグループとされ、臨海実験所の佐藤寅夫助手は長年にわたり、多数の標本の調査に努め、諸形質の比較研究を重ねることにより、これを明らかにしつつある。このたび5月4日~7日に台湾台北で開催された支日魚類分類学会議に招かれ、「スズキ亜目フェフキダイ科魚類の分類」という題で講演し、その成果を発表した。5月 (臨海)

●脊椎動物ペプシノゲンの起源 脊椎動物の祖先に当る原索動物(ホヤ)の胃に、免疫学的に脊椎動物ペプシノゲンと類似の物質が存在することを明らかにした。この物質は消化酵素活性をほとんど示さず、脊椎動物への進化過程で、分子内に活性中心を獲得した可能性が示唆された。この結果はZoological Science誌(1989)などで公表した。八杉貞雄・松永隆・水野丈夫 5月 (動物)

●西太平洋大気海洋相互作用研究計画について
最近、気候の問題が種々議論されているが、正しい気候変動の力学の理解なしに、正しい対策も、判断も、出来るわけがない。目先のゆらぎを外挿し、一喜一憂するだけである。しかし、気候とは、大気や海洋や雪氷からなる複雑なシステムであり、一挙に全貌を把握することはできない。そこで、まず最初にエネルギー源の西太平洋の暖かい海上の大気と海洋の相互作用の実態を把握する、国際共同観測を行うことを計画中である(勿論これには日本の研究者が重要な役割を果たしている)。本観測は、92/93年の冬の予定であり、それまでに、予備的な観測の実施やモデルの開発などを精力的に行う予定である。住 明正 5月 (地球物理)

●「あけぼの」衛星によるオーロラ撮像と磁場計測 去る2月22日、宇宙科学研究所の極軌道磁気圏観測衛星「あけぼの」が成功裡に打ち上げられ、4月下旬より電磁場、粒子、波動、オーロラ撮像など8項目の観測が順調に開始された。このうちオーロラ撮像と磁場計測チームには、地球物理研究施設から、金田栄祐、山本達人、林幹治、小口高（現名古屋大学空電研究所）〔オーロラ撮像〕、國分征、林幹治、飯島健〔磁場計測〕が主要メンバーとして参加している。オーロラ撮像では、8秒あるいは16秒に1画像と、これまでの衛星観測では最も時間分解能のよい真空紫外域（波長～130 nm）でのオーロラの全体像の取得に成功し、これからの成果が期待されている。（地物研）

●中性K中間子の希崩壊の研究 高エネルギー研究所のグループ（稲垣隆雄ほか）と共同で現在の理論では禁じられていたり、または非常に起こりにくい中性K中間子の崩壊モードの探索実験（E-137）を行っている。このたび約半分の実験データに基づき、現時点では世界最小の崩壊終状態 $\mu e, ee$ への分岐率の上限を得た。また終状態 $\mu\mu$ を54個記録した。これは今まで全ての実験で記録された数の和の約30個を大きく上回っている。この実験は今年7月末まで継続し、延長も計画されている。山本祐靖 5月（物理）

●特異炭素星 現在、宇宙における炭素と酸素の存在比は約1対2である。しかし、進化の終末期に当たる星の中には酸素に比べ炭素が過剰な星があり、炭素星と呼ばれている。炭素星であるにもかかわらず、周辺の放出物質の組成は酸素過剰という星がいくつか見つかって話題になっている。東京大学と国立天文台のグループはこれらの特異炭素星を電波分子線を用いて調査し、多くから水メーザーラインを発見した。更に、並行して進めている可視域スペクトルの研究は、特異炭素星が炭素星の中でも特殊なJタイプに属していることを示唆し、恒星終末期の複雑な進化が少しずつ見え始め

てきた。中田好一 5月9日（天文）

●炭酸塩質マグマ起源の岩体を構成する鉱物 このような岩石・鉱物の調査研究で1987～1988年に引きつづき再び1989年から2年間の予定でブラジルでの海外学術調査がスタートした。この岩石を構成する鉱物はV, Zr, Nbや希土類元素を含む鉱物、燐酸塩、チタン酸塩などの鉱物の他、風化によって特定の元素を濃集した二次的鉱物など希少な鉱物を多く伴う。これらは、地学的な現象のみならず無機物質種の多様性を自然に学ぶ上でも興味深い。現在は鉱物の複雑な集合組織や化学組成の解析を行なっている。ブラジルの研究者との共同作業。床次・堀内・小澤・芳賀・豊田・立川・相川（大阪市大） 5月10日（鉱物）

●海外学術調査 中国黄土高原の緑化に関する第2年度の研究を開始した。本年度から本格的な播種実験と土壌侵蝕試験を始めるが、そのための諸計測機器の設置と準備を行い帰国した。大森博雄。5月11日（地理）

●三次元物体再構築 ヒト外耳道の標本切片の連続断面画像から輪郭線を抽出し、ホモトピーの概念を応用してその表面の立体構造を再構築する方法を情報科学科國井研究室が開発。イギリスのリーズで開かれる国際会議“Computer Graphics International '89”（6月27日から30日）に投稿、論文審査の結果受理され、発表される。國井利泰・野村恭也（東大病院耳鼻咽喉科）・奥野妙子（東大病院耳鼻咽喉科）・原 誠（東大病院耳鼻咽喉科）・品川嘉久。5月15日（情報科学）

●植物コロニーの成長過程シミュレーション 情報科学科國井研究室は、Langtonの自己増殖型セルラーオートマトンを応用して、植物コロニーの成長過程をグラフィック・ワークステーション上に再現。イギリスのリーズ大学で開かれる国際会議“Com-

puter Graphics International '89 ”（6月27日から30日）の招待講演で発表される。國井利泰・高井昌彰 5月15日（情報科学）

●**第五回 TRON Project International Symposium** 1988年12月8日、9日の両日、TRON協会主催による第5回 TRON Project International Symposium が東京プリンスホテルにおいて開催された。今回のシンポジウムには約1,200名の参加者があり、論文発表、チュートリアル、機器の展示などによって、最新の TRON Project の成果が報告された。坂村 健 5月17日（情報科学）

●**日本天文学会若手奨励賞** 天文学教育研究センターの長谷川哲夫助教授の星間水素分子の赤外蛍光輝線の観測による研究に対して、第1回日本天文学会若手奨励賞が授与された。5月17日（天文教研セ）

●**第22回山田コンファレンス** 5月5日～9日に大阪国際交流センターにおいて「ストレス下における植物の水代謝と生長」に関する山田コンファレンス（組織委員長：田沢仁）が開催され、外国から14ヶ国31名、日本人を含めると計116名の研究者が参加した。イオン輸送の機構に関する分子および細胞レベルでの解析に始まり、水輸送の機構、ストレス下における水およびイオン輸送と生長等について活発な発表と討論がなされた。近年、水不足や塩害が大きな社会問題となっている。そのような深刻な状況下において、地球上における一次生産者としての植物の成育を維持することは、地球の環境維持のみならず人類の存続にもかかわってくる。そのためには単に応用面での研究だけでなく、基礎科学の分野においてストレスに対する植物の応答機構を解明していくことが必要である。このように本コンファレンスで討論されたことは植物の基礎科学の発展のみならず、地球の環境問題にも大きくかかわっている。なおコンファレン

スの内容は Proceedings として出版される。
新免輝男 5月18日（植物）

「理学部研究ニュース」欄に掲載のそれぞれのニュースの詳細については、年次報告等に紹介されておりますので、該当の教室・施設（ニュース末尾の（ ）内）に連絡して下さい。

《 学部消息 》

教 授 会 メ モ

元年3月15日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 物品寄附の受入れについて
(4) 昭和63年度卒業者の決定について
(5) 学部学生の休学について
(6) 学部研究生の入学について
(7) 学部研究生の期間延長について
(8) 平成元年度受託研究員の受入れについて
(9) 平成元年度私学研修員の受入れについて
(10) 平成元年度民間等との共同研究の受入れについて
(11) 人事委員会報告
(12) 会計委員会報告
(13) 企画委員会報告
(14) 理学院計画委員会報告
(15) 理学院計画第3次素案について
(16) 地球物理研究施設長の選出について
(17) 素粒子物理国際センター長の選出について
(18) その他

元年4月19日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 奨学寄附金の受入れについて
(4) 物品寄附の受入れについて
(5) 平成元年度私学研修員の受入れについて
(6) 教務委員会報告
(7) 人事委員会報告
(8) 会計委員会報告
(9) 企画委員会報告
(10) 理学院計画委員会報告
(11) その他

元年5月17日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 人事委員会報告
(4) 企画委員会報告
(5) 理学院計画委員会報告
(6) その他

理 学 博 士 の 学 位 取 得 者

〔平成元年1月30日付(8名)〕

専攻	氏名	論文題目
論文博士	光本茂記	室内実験による海陸風と斜面風に関する研究
論文博士	加藤辰己	サワオトギリ群の分類学的研究
相関理化学	桜井力	スズ(IV)カルコゲナイドの光物性の研究
論文博士	中村貴義	導電性ラングミュア-プロジェクト膜に関する研究
論文博士	安藤清	グラフと補グラフ
植物学	朴龍睦	海岸砂丘地におけるメヒシバとオヒシバの分布に関する生理生態学的研究
論文博士	青山隆	気相, 液相, 固相からの半導体結晶成長
論文博士	海津聡	多くの小さい穴の境界上に半線形境界条件を課されたポアソン方程式の解の漸近挙動

〔平成元年2月27日付(9名)〕

専攻	氏名	論文題目
論文博士	大鹿健一	クライン群の列の極限について
論文博士	伊藤和男	イオン打込みとアニーリングプロセスにより作成した高濃度ドーブSi薄層及び細線の電子局在の研究
論文博士	山谷純	トランスジェニック植物における植物RNAウイルスおよびウィロイド発現系の構築
論文博士	高松信彦	TMV-RNA非翻訳領域の解析及びTMV-RNAのベクター化
地球物理学	木川栄一	海洋地磁気異常を担う原因層について
論文博士	加藤茂孝	風疹ウイルスの生化学的および免疫学的研究
論文博士	渡部芳夫	瀬戸川-小仏-嶺岡帯の堆積盆発達史
論文博士	東海林まゆみ	定常波の分岐問題に対する分岐解について
論文博士	大枝一男	時間と共に境界が変化する領域における熱対流方程式の弱解と強解

〔平成元年3月16日付(10名)〕

論文博士	前田晴良	白亜紀後期アンモナイト; “ヨコヤマオセラス” 属と “キッチニテス (ネオプゾア)” 属の二型関係について
論文博士	榊剛	オゾンによる植物の初期傷害と膜脂質の代謝変動
論文博士	長谷川登志夫	シクロヘプタトリエンチオンの合成および性質
論文博士	江藤弘純	L-トリプトファン, ユビキノン-10, 1.5- μ 置換イミダゾール誘導体の実用化を目指した合成研究
論文博士	須崎純一	岩石および鉱物の熱伝導率に及ぼす圧力の効果
論文博士	細谷睦	3次元インダクタンス計算
地球物理学	高柳昌弘	深海底堆積物中の希ガス
地理学	渡辺満久	東北日本の火山フロント沿いにおける, 活断層・火山の相補的分布と低地帯の分化解式
同上	茅根創	琉球列島・マリアナ諸島における完新世の裾礁の発達
同上	山田晴通	わが国におけるCATV (有線テレビジョン) の存立基盤

〔平成元年3月29日付(1名)〕

論文博士	大島康裕	高分解能分光法と電子線分析法による分子および分子錯体の構造と分子内振動の研究
------	------	--

〔平成元年3月29日付(92名)〕

数学	山村健	Hilbert の既約性定理のある類似と打数体の分布
同上	有木進	退化ヘッケ環と退化q-シューア環の分解係数について
同上	松澤淳一	古典リー群の generalized exponents について
同上	黒瀬俊	双対接続とアフィン幾何
情報科学	吉田広行	拡張再帰グラフ型式にもとづくプロトコルの仕様記述法式
同上	太田克弘	k 連結グラフの非臨界部分グラフ
同上	鎌田富久	抽象データの図化に関する研究

専攻	氏名	論文題目
情報科学	木下佳樹	静的意味論へのモジュール構造の付加について
同上	白田由香利	拡張メニュー方式ソフトウェアのための自動生成方法論
同上	乃万司	幾何的作図, 制約, 及び伝播
同上	森継修一	数式処理アルゴリズムの研究
物理学	森茂樹	He, Ne, Ar 原子による低速陽電子の非弾性散乱
同上	鶴井博理	固相化DNAプローブの基礎と応用
同上	瀧田正人	神岡核子崩壊実験測定器による大気ニュートリノフラックスの実験的研究
同上	山田貢己	スピン1/2ハイゼンベルグ鎖の相関距離
同上	池上高志	免疫ネットワークのモデル: 抗原抗体複合体の役割
同上	石橋延幸	開弦理論の構築
同上	磯田和良	ショウジョウバエ胚の極性形成に異常を示す母性突然変異の生化学的研究
同上	岩野薫	共役高分子の格子の乱れと非線型励起
同上	小竹悟	超共形代数とその拡張について
同上	大槻東巳	有限シリンダー上の量子Hall効果における電子状態及び電流分布
同上	大野木哲也	異常U(1)ゲージ群のある四次元弦理論に於ける超対称性の破れ
同上	国場敦夫	$An^{(1)}$ に付随した新しい可解格子モデルの族
同上	小松晴子	希ガス-ハライド・エキシマー生成直後の内部状態分布
同上	後藤貴行	微粒子中の異常核スピン緩和
同上	下村裕	コリオリカ及びローレンツカを受ける剪断乱流の統計理論
同上	杉野修	リチウム金属超微粒子の電子構造と安定性
同上	田嶋直樹	原子核の非軸対称変形の自由度とK異性的崩壊
同上	堂谷忠靖	連星X線源からのX線強度の準周期的振動
同上	中川賢一	NH_3 分子の倍音振動における振動局在化
同上	中野愛一郎	電子液体の動的相関構造の研究
同上	中谷正吾	有限バンドポテンシャルによるパイエルス系の解析
同上	朴瑋宅	高温超伝導体関連物質の電子状態計算
同上	花井亮	DNA塩基配列の生物物理的研究
同上	星野勉	軽い中性子過剰核の殻模型による研究
同上	三木敬	$N=3$ 超共形代数
同上	宮澤透	一変数フォッカー・プランク方程式の理論
同上	室尾和之	レーザープラズマによる軟X線レーザー基礎過程の分光学的研究
同上	横道治男	電子核二重共鳴によるアモルファスシリコンおよびその合金系におけるダンダリングボンド中心の研究
同上	横山寿敏	ハバードモデルの変分モンテカルロ法による研究
同上	吉田篤正	「ぎんが」で観測されたガンマ線バーストのスペクトル構造の研究
同上	劉良鋼	カイラル $\sigma-\omega$ 模型における核物質の量子効果
同上	渡辺聡	化合物半導体中の遷移金属不純物の多重項構造
天文学	綾仁一哉	高分散分光観測による2型セイファート銀河の幅の狭い輝線の放射領域のガスの運動と構造の研究
同上	川邊幸子	連続波電波源いて座Aコンプレックスをとりまく分子ガスの開口合成観測

専攻	氏名	論文題目
天文学	茂山俊和	超新星の光度曲線の理論的モデル
同上	西川淳	太陽面精密測光観測装置の開発及び白斑・黒点の放射強度の観測
同上	吉岡論	爆発によって形成された宇宙論的衝撃波の衝突と宇宙の大構造の形成
同上	吉川真	カーウッドギャップにある小惑星の運動
地球物理学	井田茂	ケプラー粒子の衝突確率と惑星成長
同上	大谷晋一	地球磁気圏内における大規模沿磁力線電流系
同上	小村健太郎	オリビンのオリビンスピネル転移に伴う電気伝導度変化
同上	樋口知之	マグネトシースにおける磁場擾乱の定量的研究
化学	赤澤方省	金属表面上での低速イオンの中性化と反応
同上	岩田耕一	マイクロ秒時間分解赤外分光システムの開発とその応用
同上	浦野妙子	分光学的手法を用いたトランスースチルベンの光異性化反応の研究
同上	奥出幸二郎	光学活性ジアミン白金錯体の構造
同上	久保謙哉	ミュオンの化学的挙動の研究
同上	佐々木誠	抗腫瘍性クアシンノイド、プルセアンチンの全合成
同上	田原太平	過渡ラマン分光法による芳香族カルボニル化合物の最低励起三重項状態の研究
同上	中嶋敦	電子および原子の衝突によって誘起される化学反応の動力学—レーザー誘起蛍光法と分子ビーム法の応用
生物化学	丹治雅夫	魚類ペプシノーゲンの構造と機能
同上	荒川秀雄	α_2 マクログロブリンは、いかにプロテアーゼをトラップするか …トラップ仮設の具体像…
同上	河合剛太	転移RNAに含まれる修飾ヌクレオシドの動的構造と機能のプロトン核磁気共鳴による研究
同上	齋藤哲一郎	タバコモザイクウィルス病の外被タンパク質変異から見た分子遺伝学的解析
同上	宗行英朗	$F_0 F_1$ ATPase によるプロトン輸送に関する研究
同上	山梨裕司	血球系細胞における <u>lyn</u> 遺伝子産物の発現について
同上	渡辺嘉典	分裂酵母における減数分裂開始を決定づける <u>mei 2</u> 遺伝子の役割と発現制御
動物学	小村潤一郎	キンギョ培養細胞の特定遺伝子におけるポリミジニ量体の選択的修復
同上	林恵子	鳥類胚胃上皮の部域性の成立機構
同上	藤田敏彦	写真解析を通してみた日本産漸深海底棘皮動物の生態学的研究
植物学	竹重一彦	オオシャジクモにおける細胞内pH調節に関する研究
同上	酒井聡樹	カエデ属における分枝伸長様式の適応進化
同上	辛得龍	酵母におけるcAMPによる細胞増殖の調節
同上	デディ・ダルナエディ	ナガバノイタチシダ複合体(オンダ科)の分類学的研究
同上	光澤浩	酵母のアデニル酸シクラーゼに関する遺伝学的研究
同上	吉久徹	酵母液胞膜標識酵素 α -マンノシダーゼの遺伝子クローニングとその生合成過程の解析
地質学	山名智	Nd同位体組成から推定される珪長質地殻の進化—南韓半島及び西南日本内帯の比較
同上	児子修司	日本産デボン紀アクチノセラス目およびオルソセラス目について

専攻	氏名	論文題目
地質学	左 容 周	韓国、麟蹄-洪川地域に分布する花崗岩類についての岩石学、地球化学及び地球年代学的研究
同上	岡 本 隆	「日本石」の進化生物学的研究
同上	荻 原 成 騎	埋没統性作用における斜ブチロル沸石-輝沸石の相変化
同上	清 水 以知子	応力に誘起される岩石の微細構造
同上	石 奉 出	東シナ海、黄海および大韓、対馬海峡における第四紀堆積過程、構造および海水準変動史
同上	塚 越 哲	介形虫 Cythere 属の生物史
相関理化学	関 根 政 美	ダイズ根粒菌の IAA 合成酵素遺伝子の単離
同上	石 田 俊 正	分子軌道の立体特性と結合性の解析
同上	高 増 正	強磁場下の 2 次元系の非線形伝導現象：QHE の破壊と負微分伝導
同上	堂 寺 知 成	一次元準結晶に関する自己相似多項式の研究
同上	中 川 将 司	共鳴ラマン分光法によるバクテリオロドプシンの光反応中間体の研究
同上	野 上 由 夫	有機超伝導体 β - (BEDT-TTF) ₂ I ₃ の圧力下の超格子構造
同上	星 野 正 人	ras 遺伝子産物 p21 とグアニンヌクレオチドの相互作用に関する研究

[平成元年 4 月 24 日付 (4 名)]

論文博士	中 山 昇	3 次元複素多様体の非特異例外曲線について
論文博士	岩 瀬 彰 宏	FCC 金属のイオン照射損傷における電子励起効果
論文博士	富 田 宏	深水動波の相互作用に関する理論的ならびに実験的研究
論文博士	増 田 耕 一	FGGE データによる 1 年間の全球熱収支・水収支解析

人 事 異 動 報 告

(講師以上)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備 考
化 学	助 教 授	清 水 洋	平元. 2. 16	昇 任	講師から
"	講 師	斎 木 幸一朗	"	"	助手から
中 間 子	客員助教授	森 義 治	"	併 任	本務：高エネ研 平元 3. 31 まで
化 学	"	卷 出 義 紘	平元. 3. 1	昇 任	アイソトープ総合センター教授へ
化 " 学	教 授	佐佐木 行 美	平元. 3. 31	停 年	
植 物	"	飯 野 徹 雄	"	"	
数 学	"	藤 田 宏	"	"	
生 化	"	岡 田 吉 美	"	"	
地 物	"	佐 藤 良 輔	"	"	
数 学	"	木 村 俊 房	"	"	
化 学	"	稲 本 直 樹	"	"	
情 報	助 教 授	榎 本 彦 衛	"	辞 職	
物 理	講 師	矢 崎 茂 夫	"	"	

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
動物	講師	竹内重夫	平元. 3. 31	辞職	
物理	教授	有馬朗人	平元. 4. 1	昇任	東京大学総長へ
地物	研究	小口高	"	配置換	名大空電研教授へ
化学	助教授	吉藤正明	"	昇任	東北大教授へ
生化	"	猪飼篤	"	"	東工大教授へ
素粒子	"	武田広	"	"	神戸大教授へ
化学	教授	齋藤太郎	"	配置換	大阪大学教授から
数学	"	松本幸夫	"	昇任	助教授から
化学	"	岡崎廉治	"	"	助教授から
動物	"	塩川光一郎	"	"	九州大学助教授から
数学	助教授	長田博文	"	転任	奈良女子大学助教授から
物理	"	酒井英行	"	"	大阪大学助教授から
動物	"	八杉貞雄	"	昇任	講師から
人類	"	植田信太郎	"	"	助手から
物理	"	蓑輪真	"	配置換	素粒子センターから
伝子	"	米田好文	"	"	講師から
動物	講師	三谷啓志	"	"	助手から
"	"	藤原晴彦	"	転任	国立予防衛生研から
素粒子	客員教授	吉村太彦	"	併任	東北大学教授
"	"	戸塚洋二	"	"	宇宙線研究所教授
"	客員助教授	清水韶光	"	"	高エネ研助教授
中間子	"	森義治	"	"	"
"	客員教授	政池明	平元. 4. 16	"	京都大学教授
植物	教授	東江昭夫	平元. 5. 1	配置換	広島大学教授から

(助手)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
化学	助手	中井俊一	平元. 2. 27	休職	3. 3. 26まで
動物	"	赤坂甲治	平元. 3. 1	昇任	広島大学助教授へ
物理	"	木村芳文	"	休職更新	2. 2. 28まで
化学	"	中田賢次	平元. 3. 31	停年	
地質	"	原村寛	"	"	
物理	"	前田恵一	"	辞職	
生化	"	田澤一朗	"	"	
情報	"	石畑清	"	"	
数学	"	丸山直昌	平元. 4. 1	昇任	統計数理研助教授へ
"	"	上正明	"	"	京都大学助教授へ
情報	"	中原早生	"	"	広島大学助教授へ
化学	"	江川千佳司	"	"	宇都宮大学助教授へ
生化	"	須藤和夫	"	"	教養学部助教授へ

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
人 類	助 手	徳 永 勝 士	平元. 4. 1	配 置 換	附属病院助手へ
地 質	助 手	渡 部 芳 夫	平元. 4. 1	転 任	工業技術院へ
物 理	"	長 山 好 夫	"	休 職	3. 3. 31 まで
中 間	子	門 野 良 典	"	休職更新	2. 3. 31 まで
数 学	"	中 村 博 昭	"	採 用	
"	"	河 澄 響 矢	"	"	
"	"	石 村 直 之	"	"	
物 理	"	下 村 裕	"	"	
"	"	横 山 順 一	"	"	
"	"	生天目 博 文	"	"	
化 学	"	田 原 太 平	"	"	
"	"	久 保 謙 哉	"	"	
生 化	"	北 島 健	"	"	
地 質	"	荻 原 成 騎	"	"	
地 殻	"	石 橋 純 一 郎	"	"	
生 化	"	井 上 英 史	平元. 4. 16	"	
物 理	"	蓮 尾 昌 裕	"	"	
化 学	"	茅 田 博 一	平元. 5. 16	"	

(職 員)

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
化 学	事 務 官	菅 澤 理 恵 子	平元. 3. 1	転 任	富山大助手へ
生 化	技 官	宮 崎 敏 夫	平元. 3. 31	定 年	
動 物	事 務 官	長 田 美 子	"	"	
鉱 物	用 務 員	梅 村 久 子	"	"	
植 物 園	技 官	甲 斐 正 人	"	"	
臨 海	用 務 員	石 渡 綾 子	"	"	
事 務 部	給 与 掛 長	星 圭 介	"	"	
数 学	事 務 官	齋 藤 智 恵 子	"	辞 職	
事 務 部	事 務 長 補 佐	蓮 見 公 一	平元. 4. 1	配 置 換	附属病院総務課課長補佐へ
"	"	土 居 喜 公	"	"	経理部経理課課長補佐へ
"	学 務 主 任	田 中 満 嘉	"	"	医学部学務主任へ
"	司 計 掛 長	渡 邊 隆 夫	"	"	経理部主計課予算第一掛長へ
"	経 理 掛 主 任	青 木 道 子	"	"	附属病院管理課給与掛主任へ
植 物	事 務 官	山 田 理 子	"	"	附属図書館情報サービス課へ
事 務 部	事 務 長 補 佐	木 村 登	"	昇 任	海洋研究所総務課庶務主任から
"	"	北 川 嘉 一	"	配 置 換	宇宙科学研究所 主計課課長補佐から
"	学 務 主 任	白 井 照 明	"	"	法学部大学院掛長から
"	司 計 掛 長	根 本 豊 作	"	昇 任	経理部主計課 企画法規掛主任から

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
事務部	給与掛長	北英介	平元. 4. 1	配置換	国立歴史民俗博物館 会計課経理係長から
"	人事掛主任	植木祐輔	"	昇任	人事掛から
"	経理掛主任	渡邊和子	"	"	工学部附属 総合試験所会計掛から
地理	事務主任	鎌滝道子	"	"	事務部庶務掛主任から
地物	事務室主任	渡邊和子	"	"	数学から
動物	"	増田曙子	"	"	人類から
事務部	事務官	朝野英彦	"	配置換	地理から
"	"	安部秀明	"	"	臨海から
数学	"	杉本美也子	"	"	用度掛から
植物	"	山谷弘美	"	"	化学から
人類	"	塩谷祥子	"	"	地物から
化学	"	真原節子	"	"	庶務部人事課から
臨海	"	山崎泰生	"	"	附属病院医事課から
事務部	"	高橋喜博	"	採用	実務研修生から
地物	"	江本桂子	"	"	"
"	"	古谷具子	"	"	"
"	技官	黒澤聖奈子	"	"	"
情報	"	高田広章	"	"	"
植物園	守衛	東城忠幸	平元. 4. 15	辞職	
事務部	庶務掛長	堀内勉	平元. 5. 1	配置換	東洋文化研究所庶務掛長へ
"	専門職員	小谷昭	"		庶務掛長併任

外国人客員研究員報告

所属	受入れ教官	国籍	氏名	現職	研究員期間	備考
化学科	増田教授	中華人民共和国	QI LU 其魯	内蒙古大学講師	元. 4. 1 ~ 2. 3. 31	63.7 教授会 了承済みの 延長
物理学科	小林助教授	ハンガリー	JANSZKY, Jozsef	ハンガリー科学アカデ ミー結晶物理研究所 主任研究員	元. 5. 24 ~ 元. 10. 28	
情報科学科	米田教授	中華人民共和国	SUN YONG QIANG 孫永強	上海交通大学計算機 科学科教授	元. 4. 20 ~ 元. 7. 20	
物理学科	大塚助教授	ドイツ連邦共和国	GELBERG, Adrian	ケルン大学原子核物理 学研究所教授	元. 6. 7 ~ 元. 8. 7	

平成元年 3 月 28 日 卒業者

数 学 科

落合 信一郎	国越 健司	桧垣 優徳	粳田 浩司	大森 直人
相馬 正宜	藤井 貴也	東 孝彦	海田 孝之	大野 浩司
奥野 文彦	勝 亮三	河井 真吾	菊池 和徳	清野 和彦
久保 克維	雲 孝夫	郡司 隆央	小宮山 弘樹	櫻井 元之
定方 康明	調 麻佐志	杉本 徹	寶島 格	高野橋 雅之
田中 徹	谷口 雅治	田原 康之	田畑 邦一	鳥巢 浩幸
永矢 純一	平田 昭雄	松田 茂樹	松田 洋	松橋 幸平
真鍋 浩	宮崎 泰彦	武川 崇之	森本 晴夫	森本 祐司
山根 英司	雪吉 雅之	吉村 茂	吉本 力基	

44名

情報科学科

河津 文夫	浅見 賢	池田 拓朗	伊藤 眞理	猪原 茂和
加藤 尚志	金田 秀則	神谷 健一	川崎 優	越塚 登
後藤 洋伸	柴山 潤理	鈴木 清	中野 裕彦	中村 公治
橋本 伊知郎	平手 伸明	深澤 寿彦	前田 薫	溝上 敏文
森 毅	脇田 建	渡邊 隆		

23名

物理学科

吾妻 広夫	嶋作 一大	高橋 邦明	武井 伸勝	竹内 純一
田村 浩二	中村 浩章	林 宣宏	山内 淳	浅沼 達彦
朝原 治一	池田 裕彦	池橋 民雄	石川 眞一郎	石原 諭
大高明 浩	大友 清隆	大場 竜二	小笠原 弘之	小川 一路
岡本 拓司	奥野 広樹	金田 修明	神田 晶申	草部 浩一
栗原 一嘉	香村 芳樹	小西 秀	小林 礼人	酒井 博隆
坂井 任	櫻井 信	清水 裕子	菅原 祐二	隅野 行成
高橋 宗司	高橋 哲夫	竹谷 純一	角田 達彦	中島 龍也
中村 哲	中山 洋子	長澤 倫康	長澤 豊	長嶋 満宏
永尾 太郎	永野 輝明	成島 武成	野々村 禎彦	野村 晋太郎
羽賀 隆雄	服部 裕司	林 正彦	廣瀬 賢二	福久 良司
堀 健太郎	本間 道雄	真柳 浩太	光岡 薫	宮本 隆志
向井 秀夫	持田 正	矢吹 正典	山岡 典子	山川 央
山田 知之	山名 啓雄	山本 哲史		

68名

天文学科

山下 由香利	阪本 成一	櫻井 直子	鈴木 洋一郎	内海 紀代美
富岡 千幸				

6名

地球物理学科

井門章夫	吾妻瞬一	荒木博志	伊賀啓太	江川尚志
大谷十茂太	尾崎友亮	加藤孝志	草場匡宏	倉本圭
武井康子	武山由花	谷山尚	灘井章嗣	平山義治
保坂征宏	松岡彩子	山中康裕	吉田尚史	吉本真由美

20名

化学科

明山浩一	池上努	一國伸之	岩倉和憲	梅村泰史
大貫裕之	太田仁	金沢孝記	狩野直樹	神野秀雄
草間博之	越田正樹	後藤敬	齊藤常雄	齊藤雅俊
酒井元	坂本章	坂本稔	櫻井英博	笹川紀子
柴田高範	菅井俊樹	鈴木孝廣	高橋亮	佃達哉
都甲圭史	中條彰	長嶺真	西澤裕行	廣川淳
深作貞文	福井賢一	前川智範	松村正浩	真船文隆
三嶋謙二	村上紳一	村田士乃武	毛利大介	森朋有
和賀井晶	渡邊哲也			

42名

生物化学科

浅野桂	内野尚	細田志津子	伊藤ふみ	伊藤隆
臼田佳弘	大石真己	片岡浩介	加藤明彦	川上穰
川岸万紀子	木川隆則	坂本敏夫	佐藤宏宣	鈴木健之
玉野上佳明	中村協子	東島真一	檜原理史	三國修
吉田理恵				

21名

生物学科

(動物学)

尾田正二	宮東昭彦	見學美根子	酒井恵里子	鈴木雅一
深津武馬	福田公子	藤井元	森育枝	山本直之

生物学科

(植物学)

足立直樹	酒井敦	佐々木信吾	鈴木祥弘	山下博史
湯淺高志	頼藤徹也			

7名

生物学科

(人類学)

田邊秀之	長尾吉郎	石井克佳	西澤哲	吉村美紀
渡邊裕二				

6名

地 学 科

(地質・鉱物学)

勝井修二	石田 聡	岩重雄治	大村陽登志	近藤博之
角田睦雄	徳永朋祥	中村智樹	原田 勲	日高徹司
星井宏之	三角幸生	望月健吾		

13名

地 学 科

(地理学)

田崎英樹	井上耕一郎	植田裕之	大野拓也	福山浩史
矢野陽一郎				

6名

合 計 266名

海 外 渡 航 者

(6月以上)

所 属	官 職	氏 名	渡 航 先	期 間	目 的
物 理	助 手	長 山 好 夫	アメリカ合衆国	1. 4. 1 ~ 3. 3. 31	TFTTR (核融合の装置) を使った核融合の研究のため
植 物	〃	佐 藤 直 樹	フ ラ ン ス	1. 4. 1 ~ 1. 10. 2	フランスCEN核研究センターで植物生化学に関する共同研究及び研究連絡を行うため
動 物	〃	武 田 洋 幸	アメリカ合衆国	1. 4. 25 ~ 2. 5. 4	発生生物学に関する研究のため

平成元年度科学研究費補助金採択（内定）さる

本年度科学研究費補助金の交付申請に対し、4月27日付で、本学事務局経由により同補助金の採択（内定）の通知がありました。（特別推進研究(1)、(2)は7月下旬交付内定のため未定）

理学部関係の申請件数および採択件数は次表のとおりで、総額945,950,000円（遺伝子実験施設2,600,000円：外数）でした。

平成元年度科学研究費補助金理学部申請・採択件数一覧表

平成元、6.1現在

区分 研究種目	申請件数	採 択 件 数			採 択 率
		新 規	継 続	計	
特別推進研究(1)	2(1)				
特別推進研究(2)	3(2)				
がん特別研究(1)	1	0	0	0	
がん特別研究(2)	3	2		2	66.7%
重点領域研究(1)	22	20		20	90.9%
重点領域研究(2)	53	25		25	47.2%
総合研究A	21(7)	7	8	15	71.4%
総合研究B	5	4		4	80.0%
一般研究A	27(12)	7	14	21	77.8%
一般研究B	64(13)①	12①	13	25①	39.1%
一般研究C	97(18)	31	15	46	47.4%
奨励研究(A)	69①	34		34	49.3%
試験研究(1)	6(2)		2	2	33.3%
試験研究(2)	24(3)	5	2	7	29.2%
奨励研究(A)特別研究員	57(37)	33	14	47	82.5%
合 計	454(95)②	180①	68	248①	54.63%

昨年は、申請件数424件、採択件数246件、採択率53.07%であった。
 () 継続申請：内数 ○遺伝子実験施設：外数

東京大学職員の永年勤続者表彰

平成元年3月31日付で、定年退職される下記職員に対する総長からの表彰状・記念品が3月24日(金)正午、学部長室において藤田学部長から伝達された。

平成元年4月12日(水)午後3時から神田学士会館において永年勤続者(20年勤続)表彰式があり本学部では下記の方々表彰を受けた。

記

化 学 中 田 賢 次
 生 化 宮 崎 敏 夫
 動 物 長 田 美 子
 地 質 原 村 寛
 鉱 物 梅 村 久 子
 植 物 園 甲 斐 正 人
 臨 海 石 渡 綾 子
 事 務 部 星 圭 介

記

物 理 蔵 蘭 希 望
 化 学 山 本 学
 事 務 部 根 本 豊 作
 " 北 英 介
 " 若 林 則 子
 " 安 田 正 子

理学部長と理職の交渉

3月20日、4月10日に理学部長と理学部職員組合（理職）の定例の交渉が行われた。また、3月10日には理学院計画についての緊急学部長交渉（和田理学院計画委員長が出席）が行われた。その主な内容は次のとおりである。

1. 技術系職員の組織化問題について

3月20日の交渉では、4月1日には技術系職員の組織化を実施しないことが研究所長会議と学部長会議で了承されたのを受けて、理職がすでに組織案を提出してある理学部の対応を問うたのに対し、藤田学部長は、組織化は5月1日をめどに進めると聞いている、組織化に必要な組織規定は企画委員会では了承されている、私は3月31日までであるが、それを出すタイミングは全学の状況を考えて決めると答えた。さらに、3月7日に事務局長から下りてきた4月1日以降組織化を進めるという通知をどう受けとめているのか問うたのに対し、受け取っているが、期限が記してない通知でもあり、これに応じてただちに組織規定を出すようなことはしないと答えた。理職は、組合との合意なしで、組織規定を本部に出さないようにと要求した。

4月10日の交渉では、理職が東京大学職員組合が出した統一要求を示し、理学部でもこの線に沿った組織化を行うように要求したのに対しては、和田学部長は、今初めて見るものである、これから検討したいと答えた。また、新しく小口委員会を引き継ぐ、田沢評議員は、技術系職員の人達とよく話し合い、働きがいのある職場作りのために皆さんの知恵をお借りしたい、学部長とも相談して今まで蓄積されたものを引き継いで行きたいと抱負を述べた。

2. 理学院計画について

3月10日の緊急学部長交渉では、理職が「第3次素案」に反対する決議を手渡して、「第3次素案」の撤回と改革論議の根本的な再検討を要求したのに対して、和田計画委員長は身分制としての助手制度は必要であると明言したり、大学職員の昇格の劣悪さの原因は何かと、逆に組合側に質問するといった問題発言を繰り返し、理職の指摘に理解を示さなかった。3月26日の交渉で、和田計画委員長は、教授会では、教養学部・付置研究所との関連、助手制度の見直しについて意見

が出たのみで、挙手による評決の結果、賛成多数で今後一年かけて「第3次素案」を基に検討を続けることで了承されたと述べた。これに対して、理職は助手制度の見直しを理学院計画に盛り込むべきであると主張した。和田委員長は身分制度としての講座制の変更はしない、全国大学に波及する事であり、問題が大きすぎると答え、助手制度は理学院とは切り離して議論すべきであるとの考えを示した。また、理職が定員増は理学院では不可欠であると主張したのに対しては、定員増なしには理学院表現はあり得ないと答えた。4月10日の交渉では、「第3次素案」を了承した3月15日の教授会直前に行われた素案の変更点のうち、学外者を含めた広域理学院の研究成果評価委員会の設置について、大学の自治の観点等からして問題があると理職が指摘したのに対し、和田学部長は、学外者による評価は必要であり、教授会は評価委員会の決定を覆す事ができると答えた。さらに、和田学部長は理学院調査費として概算要求を出すこと、10月末に「第3次素案」を基にした原案を出したいと発言した。

3. 昇格改善要求について

理職は事務職員の昇格改善について、教室事務は裾野の広い職場であり組織化には馴染まないことを指摘し、たくさんいる3級の高位者俸者の昇格を、専門職員として学部につけることで進めてもらうよう要求した。また、事務主任の6級昇格の見直しについて、事務長は、早く実現するようにお願いはしているが、従来はやめる1年前であると答えた。理職が、女性の事務職員は昇格において差別されており、在級10年以上でないとポストに付けないことを訴え、やめる2年前昇格の最低限実現に希望は持てるのかと問うたのに対して、事務長は何ともいえないと答えた。秘書の昇格が3級止まりであることから、その専門性を考慮して専門職とすることで秘書の昇格改善を図って欲しいとの要求に対して、和田学部長は専門職は無理だと思いと述べた。技官の昇格改善については、組織化とは別に行うように要求した。

4. 教務職員の助手化について

理職が、教務職員の頭打ちの実状を資料を提示して訴え、できるだけ早く助手化して、救済するよう要求

したのに対して、和田学部長は、低賃金であるのはわかった、やめる半年前に助手化するよう努力していると答えた。半年前でなくもっと早い時期にできないのかと問うたのに対しては、待遇改善での助手ポストの一次的流用としては半年前が限度である、それ以上は普通の助手としての扱いになると答えた。

5. 行(二)技能職員の4級昇格について

事務長は、生化の人の昨年度の昇格要求が通らなかった理由は在級年数の不足であると述べたのに対し、理職は、化学の人の昇格条件は完全に満たされているので昇格を実現するよう要請した。これに対しては、事務長は、そのように申請すると答えた。

6. 賃上げ問題、春闘について

同じ国家公務員でも他省庁では退職する時に7、8級は当然であるのに、大学職員はようやく、退職時に3級であるという実態が解消されたところで、4～6級でやめるという状態であると大学職員の低賃金を訴えたのに対して、和田学部長は、なぜ格差があるのかと、理職に問うた。理職は、他省庁では上位級をとってくるための努力をし、方策を考えて実現してきている、大学職員の劣悪な待遇は、当局の怠慢が原因であると答えた。さらに、理職は事務長制（事務長は7～

8級）の理学部と事務部長制（事務部長は8～9級）の工学部などの間には、全体として待遇格差がある、また他省庁では専門職員を利用して上位級を追求している、などの事務系職員の例をあげ理学部当局の工夫がたりないと訴えた。大学職員の待遇が遅れている事実を踏まえて、学部長は文部省なり、総長への上申等を要請したのに対して、和田学部長は、文部省にはどうやって働きかけたらよいかかわからないが、総長には上申すると答えた。

7. 研修費について

理職が、63年度理学部予算の中で連絡経費の内、事務・技術職員研修費として299,000円計上されたが、どの様に使われたのか内訳を問うたのに対し、事務長は調べてお知らせすると答えた。理職は、技術職員の内この研修費を使えるのは名大プラズマ研究所、分子科学研究所、高エネルギー物理学研究所主催の技術研究会へ出張する人だけであり、他の分野の出張はその研修費を利用できない。また、旅費が出ない人は有給休暇をとって研修している、このような技術職員にも研修費も出せるようにしてほしいと要請した。これに対し、和田理学部長はすぐにやるところでは言えないが、検討すると答えた。

各号館（運営委員）長名簿

（平成元、4、1現在）

号館名	所属	職名	氏名	内線番号	任期
1	物理	教授	井野正三	4208	元. 4.1 ~ 2. 3. 31
2	人類	教授	遠藤萬里	4483	元. 4.1 ~ 元. 7. 31
3	天文	教授	堀源一郎	4257	元. 4.1 ~ 2. 3. 31
4	物理	教授	壽榮松宏仁	4127	元. 4.1 ~ 2. 3. 31
5	数学	教授	増田久弥	4049	元. 4.1 ~ 2. 3. 31
7	情報	教授	後藤英一	4113	元. 4.1 ~ 2. 3. 31
化学	化学	教授	岩村秀	4356	元. 4.1 ~ 2. 3. 31

（2号館：4ヶ月交替 動物 → 地理 → 植物 → 人類 → 動物）

教室主任・施設長等名簿

(平元・4・1現在)

教室・施設名等	教室主任 施設長等氏名	電話番号	自宅電話番号 (緊急連絡先)
数 学 教 室	増 田 久 弥	4049	
情 報 科 学 教 室	國 井 利 泰	4116	
物 理 学 教 室	鈴 木 増 雄	4193	
天 文 学 教 室	堀 源 一 郎	4257	
地 球 物 理 学 教 室	熊 澤 峰 夫	4310	
化 学 教 室	岩 村 秀	4356	
生 物 化 学 教 室	酒 井 彦 一	4396	
動 物 学 教 室	嶋 昭 紘	4441	
植 物 学 教 室	安 楽 泰 宏	4461	
人 類 学 教 室	遠 藤 萬 里	4483	
地 質 学 教 室	島 崎 英 彦	4514	
鉱 物 学 教 室	武 田 弘	4543	
地 理 学 教 室	鈴 木 秀 夫	4572	
臨 海 実 験 所	高 橋 景 一	4426 0468(81)4105~7	
植 物 園	黒 岩 常 祥	(814)0138~9	
地 球 物 理 研 究 施 設	玉 尾 孜	4582	
分 光 化 学 セ ン タ ー	増 田 彰 正	4349	
中 間 子 科 学 研 究 セ ン タ ー	上 村 洸	4225	
地 殻 化 学 実 験 施 設	脇 田 宏	4621	
素 粒 子 物 理 国 際 セ ン タ ー	山 本 祐 靖	4177	
天 文 学 教 育 研 究 セ ン タ ー	内 田 豊	4260	
遺 伝 子 実 験 施 設	堀 田 凱 樹	4144	
学 部 長	和 田 昭 允	4000	
評 議 員	久 城 育 夫	4506	
評 議 員	田 澤 仁	4457	
事 務 長	野 島 博	4001	
事 務 長 補 佐 (総 務 担 当)	木 村 登	4002	
事 務 長 補 佐 (経 理 担 当)	北 川 嘉 一	4004	
学 務 主 任	白 井 照 明	4003	

編 集 後 記

皆様、今回の理学部広報の表紙はいかがでしょう？ 少しでも親しみやすく読みやすい広報にできないものかと編集委員会で考え、一新したものです。2色刷りとなったこともありますが、これまでのものよりモダンで親しみやすいものになったのではないかと、編集子は自己満足しております。表紙などのデザインについては人によって好みも異なり、おほめいただく方もあれば元のままで良いという方もおられると思いますが、ご意見を承りますればと存じます。

理学部広報の存在意義につきましては前編集委員長の高橋先生（植物）の20巻4号の編集後記にもありますように意義を認める人認めない人、いろいろおられるとは存じますが、理学部内のコミュニケーションの場としてそれなりの役割を果たしてきたことは明らかです。また昨年より、現理学部長 和田昭允先生の発案により理学部研究ニュースの欄が新設されました。これは広報を内部のコミュニケーションの場としてだけでなく、積極的に外部の人に東大理学部について知っていただくという宣伝誌の側面も強めようと言うことを意図しているわけです。実際、新聞社、通信社の記者の方から、この研究ニュースをきっかけとして記事を書かれたということを10余件聞いております。各教室の主任の先生方にはお手数をおかけすることになりますが今後とも積極的に研究ニュース欄にご投稿下さいますようお願い申し上げます。

世の中はいま宣伝の時代だそうで、多くの国立研究所からはカラー印刷の大変立派な広報誌が発行されております。貧乏世帯である我が理学部には真似のできないことですが、三鈴印刷のご協力の元に表紙の2色刷りと若干の紙質向上を計ることができました。このグレードアップにふさわしいように内容もより充実できればと意気込んでいる次第です。

（佐藤）

編集：

佐藤勝彦(物理)	内線	4207
横山茂之(生化)		4392
内藤周弑(分光)		4600
松本良(地質)		4525
高橋正征(植物)		4474
小谷昭(中央事務,庶務掛)		4005

印刷.....三鈴印刷株式会社